

南京と「和解」―歴史の深淵に橋をかける

小田博志

北海道大学准教授

南京で2011年10月に行なわれたこのセミナーに参加する機会を与えてくださった村本邦子さんに感謝いたします。日本からの一行を寛大に迎えいれてくださった張連紅教授、出会いの磁場をつくり上げてくださったアルマンド・ヴォルカスさんにも深い謝辞を捧げます。ここでは、セミナー参加にいたる個人的な経緯、セミナーの感想、そして4日間の経験を振り返って考えたことをまとめました。この小文が、私たちが平和の^{ビジネス・ワーク}仕事を促進するための貢献となれば幸いです。

回り道して中国へ

平頂山事件のことを思い浮かべた。

これが、私が日本軍による中国での蛮行と正面から向き合うようになったきっかけだった。それまで私は（おそらく他の多くの日本人がそうであるように）、日中の間にある負の歴史に関わる場所を訪れることをしなかった。

2009年の1学期に、私は半年間の研究休暇を取って、ベルリンに滞在していた。主な研究テーマは、ドイツと関わる歴史和解の市民レベルの取り組みであった。具体的には、ベルリンに本拠を置くキリスト教系の組織「行動・償いの印・平和奉仕（Aktion Sühnezeichen Friedensdienste）」を対象に調査を進めていた。これはロター・クライシヒという人物が呼びかけて1958年に設立された団体で、ナチによる不法行為を止めることができなかったドイツ国民としての罪の意識から、被害を受けた人びとのために「償いの印」となるような奉仕活動をするを目的とするものだ。現在では年間約180人の長期ボランティアを10カ国以上に派遣し、また毎年夏には各地でサマーキャンプを実施している。

私はチェコのテレジン強制収容所跡で行なわれた2週間のサマーキャンプに参加した。その中のエクスカージョンとして、テレジン近郊にあるリディツェという村に行った。正確にいうと村の跡だ。チェコは1939年からナチスドイツに占領された。その副総督ハイドリヒが1942年にプラハで暗殺されると、実行犯との関わりがあると濡れ衣を着せられたリディツェ村の抹殺がヒトラーの意志のもと実行された。住民約500人のほとんどが虐殺され、建物は跡形もないほど破壊され、村は消し去られた。現在ここは、ナチの蛮行を思い起こし、住民の犠牲を追悼する場所となっている。記念館も建立されている。サマーキャンプのメンバーと共にここを見学していた私は、「確か同じような話が中国であったぞ」と思った。それが平頂山^{へいちやうざん}だった。

平頂山は村の名前だ。私はその跡を2010年3月に訪ねた。中国東北地区の遼寧省の省都瀋陽から東へバスで1時間ほど走ると撫順^{ぶじゅん}にいたる。巨大な露天掘り炭鉱で有名な町である。この地域の占領を狙う日本軍（関東軍）は、1931年9月18日に瀋陽近郊で柳条湖事件を引き起こし、翌年、傀儡国家「満州国」を作り上げた。撫順炭鉱は日本にとって重要な石炭の供給源であった。柳条湖事件のほぼ1年後、現地の抵抗勢力が撫順炭鉱を襲撃した。これは日本側にとり痛恨の出来事であった。犯人を追う過程で関東軍は、炭鉱の最寄りの集落、平頂山に目をつけた。抵抗勢力とのつながりがあるという嫌疑をかけたのである。そして、1932年9月16日に平頂山の住民全てを一箇所に集め、見せしめのため機関銃を照射して虐殺を実行した。さらに生き残っている者を殺すために銃剣で突き刺して回った。翌日には積み重なった死体の上に重油をかけて焼き、ダイナマイトで虐殺現場の上方の崖を崩して、死体を埋めたといわれている。その犠牲者総数は三千人と推定されている（平頂山事件訴訟弁護団2008）。奇跡的に生き延びた数人の元住民が、後年東京地裁に損害賠償裁判を起こした。判決でその請求は棄却されたが、集団虐殺の事実については認定された。平頂山は「アジアのリディツェ」と言える。しかし、平頂山事件がリディツェ住民虐殺より10年前に起こったことを考えると、むしろリディツェが「ヨーロッパの平頂山」と言った方が正確だろう。

この平頂山事件の犠牲者の遺体は第二次世界大戦後になって発掘され、1972年に遺骨出土現場をそのまま展示する「平頂山殉難同胞遺骨館」がオープンし

た。現在では平頂山事件の歴史的経緯を展示する博物館「平頂山惨案遺址紀念館」も併設されている。私が訪れたときには日本語ができるガイドもいた。

南京事件のレポートである本稿に、平頂山事件のことを長々と書いたのは、日本の中国侵略には前史があり、そのつながりの中で南京事件があることを確認しておきたかったからだ。平頂山事件は、日中戦争開始よりも5年前に起こっているのである。また撫順には日本兵約千人が戦後収容され、自らの加害の罪を認識するにいたった撫順戦犯管理所、北方のハルビンには細菌・毒ガス兵器の開発と生体実験で悪名高い七三一部隊の跡があり、現在ではそれぞれ博物館として見学可能であることもつけ加えておきたい。

このようにヨーロッパ経由で回り道、というよりUターンをして、私は中国における日本軍の加害の跡を見ることになった。そのようなことをせず、直接中国を訪れる若い日本人学生たちがいることを思うとお恥ずかしい限りだ。しかしおそらく私のような日本人も多いのではないかと思っている。するとこれは構造的問題ということになる。日本と中国とを隔てる記憶の壁は高い、もしくは記憶の海溝は深い。なぜそうなのか、そこにいかに橋をかけるのかを考えなくてはならない。私の経験ではそのために意味があるのが、やはり現地を訪れること、そして現地の人びとと交流することだ。そのために私は今回の南京セミナーへの参加を望んだ。

南京での4日間から

初日の午前中は張教授の南京事件に関するレクチャーと、それにプレイバックシアターが組み合わせて行なわれた。そこで印象に残ったのは、「日本兵に対する祖母の感情は矛盾している」というある中国人学生の話だった。この学生の祖母は、戦時中日本兵から飴をもらったのだという。だが祖母の父（この学生の曾祖父）は別の日本兵に殺された。「日本兵に対する憎悪」という単一の感情に収まらない、このような微妙な声は、現場でなければ聞くことができないだろう。

2日目の午前中は幸存者・夏淑琴さんの証言を伺った。夏さんは8歳のときに、その身で南京大虐殺を体験した。両親と祖父母、そして3人のきょうだいは日本兵によって殺された。母と姉はその前に強姦された。夏さん自身銃剣で体を突

き刺され、血まみれになりながら、幼い妹と共に14日間を家の中で耐え忍んだ末に保護された。夏さんは「泣いて泣いて、目が見えなくなるまで泣いた」のだと言う。日本兵に刺された「傷口が大きくなって痛い」と感じることもあった。そこへ日本人のある著述家が夏さんを「嘘つき」呼ばわりする本を出版した。夏さんの憤りはどれほどだったのだろうか。夏さんは南京そして東京で名誉毀損の裁判を起こした。東京地裁では夏さんの訴えが認められ、最高裁によって被告側の上告が棄却されたので夏さんの勝訴が確定した。私は南京に来るまで、夏さんのことも、彼女に関わってこのような出来事も知らなかった。そのことを恥ずかしいと思った。夏さんは「日本軍国主義者と民衆」とを分けて、「(このセミナーに参加している)あなたたちには罪はない」と言ってくださった。それは私たちの身に余るほどの思いやりだ。夏さんはどのようにして、そういう見方を取るようになっていったのだろうか。裁判を通して日本側の支援者と接するようになってからだろうか。そこに人間関係の修復としての和解の鍵があるような気がするので、もっと詳しくお聞きしたいと思った。

このセミナーという場が成り立つ上で、ファシリテーターであるアルマンド・ヴォルカスさんの存在感が大きかった。彼がいるおかげで、他の参加者は安心してその場にいられるし、胸の内をあかせるのだと思う。平和学者のヨハン・ガルトUNGさんは、和解のために「仲介者」が必要だと言っているが、ヴォルカスさんはこの上ない仲介者となってくれていた。

3日目にはプレイバックシアターの真価を見たように思った。ある日本人参加者が、戦争被害を訴える多数の中国人のただ中に入り込んだときの圧倒感。別の日本人学生が、やさしい祖父と、志願兵として戦争に参加していた祖父との間で揺れ動く困惑した思い。こうした感情を、プレイバックシアターの人たちは増幅し、生きられた人間的状況として伝えることに成功していると感じた。そこから相手の立場に立つことが促進されたのではないだろうか。ヴォルカスさんは「互いを人間化すること」と表現していた。これは顔と顔を合わせ、互いのストーリーを語り合うことである程度可能となると思うし、このセミナーでもそれが実際のものとなった。プレイバックシアターは、この人間化のプロセスを促進する、とてもユニークな役割を果たすことができることを知った。

最終日には全員で揚子江沿岸の燕子磯公園にある「遭難同胞記念碑」で追悼式

を行なった。ここは日本軍に追い詰められ、対岸に渡ろうとする多くの中国人が犠牲になった所だ。ここは景勝地でもあるので、観光目的の中国人もひっきりなしに訪れる。私たちが、日本人と中国人とでペアになって、順番に記念碑に献花してっていると、そうした中国人入園者が立ち止まって、何をしているのかと尋ねることがある。そんな中に、日本語を勉強していて、九州に留学したいという青年もいて、私たちのセレモニーのためにかなり長く立ち止まっていた。インフォーマルながら、これもひとつの大切な交流なのだ。

セミナーの締めくくりに、ひとりひとりが記憶のオブジェを持ち帰りながら一言ずつ発言していった。私の言葉は、「私たちはかけ橋です」というものだった。相互理解、つまり相手の側に立って理解することが、この4日間、私の目の前で、また私自身の中でもいろいろな形で実現していった。それはあたかも歴史の中でつくられてしまった深淵を越えて、互いに行き来できる橋がかけられるようなものだった。

考えたこと1：「東アジア」の独自性？

このセミナーは、科学研究費補助金による研究プロジェクト「日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発」の一環として開催された。その目標のひとつは、ヴォルカスさんのHWH (Healing the Wounds of History) のコンセプトを、東アジアに独自の条件を考慮して、修正・応用することだろう。

ここで「東アジア型」とは何かを判断すること自体が容易ではない。「欧米は個人主義で、東アジアは集団主義」という類の類型論は、実は根拠のあやしいステレオタイプだと思った方がよい。この「個人主義 vs. 集団主義」について振り返ってみると、その裏には個人主義の方がより近代的で、進んでおり、これに対して集団主義は旧態依然とした社会の特徴であり、後者は前者へと進歩していくものだというような、暗黙の進歩図式がある。これは「近代西洋」を進歩の最先端に置く、「西洋」の自己意識が生み出した幻想のようなものだ。これを鵜呑みにすべきではない。「西洋人」も集団主義的に振舞うことがあれば、「東洋人」が個人主義になることもある。この違いは本質的なものではなくて、現実には文脈に応じて複雑な現れ方をするものだ。

他にも「東アジアの特徴はこうでヨーロッパはどうだ」とか、「日本文化はこうで中国文化とはこう違う」といったいろいろな理解の枠組みがすでに一般に浸透している。困ったことに、一般のみならず、心理学、社会学、文化人類学の分野でも、学説の顔をしてそうしたステレオタイプがはびこっているのだ。そうした理解の枠組みは、生きた現実とは違っているので、無反省に前提にすると、現実には適合するどころか、現実から遠ざかってしまうおそれがある。

そもそも「東アジア」という自立した単位があるのかどうか、そしてそこに他と違う何らかの独自性があるのかどうかさえ定かではない。「アジア」とはそもそも「ヨーロッパ」が与えたいわば便宜的な地域区分ではなかったか。

セミナーの間、ある中国側の参加者が「日本は“恥の文化”だから、戦争に負けたことを認めず、謝罪もしないのだろう」と述べたことがあった。この「日本は恥の文化」という捉え方も、典型的なステレオタイプだ。おそらくその参加者は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』の中国語訳を読んでいたのだろう。文化人類学者ベネディクトは日本を訪れることなく、戦時中に米国内で強制収容された日系人とのインタビューや、英語に翻訳された書籍などを通して、「日本文化」のパターンを記述した。それはあくまでも仮説的な構築物だ。実際の「日本文化」や「日本人」にあてはまらない側面も多々ある。また明確に他から区別される「日本文化」なるものが、実体として存在するのかどうかということも、現在の文化人類学においてはむしろ批判的に考えられるようになっている。

だから問題は、「東アジアは本質的にどのような社会か」とか、「日本兵の残虐行為の背景に日本文化があるのかどうか」とか、「それに対して中国文化はどのようなものか」といったものではなく、「そうしたステレオタイプを越えて、私たちがいかに人間として出会い直すか」であり、また「そのために何が必要か」ということではないだろう。

そのときに意味があると思えるのは、「東アジア」の現実を構成している、歴史的、地政学的要素」を具体的に分析して、考慮に入れることだろう。その最大のもののひとつが、ヨーロッパと違って、東アジアでは冷戦構造がいまだに残存しており、それが社会を分断し続けていることだ。朝鮮半島は韓国と北朝鮮に分断されたままだ。

東アジアの現実を作り上げているのは、地理上の東アジアの国々だけではない。それ以外に米国とロシアが挙げられる。特に米国は1951年のサンフランシスコ平和条約の締結を急ぎ、その中で日本の戦後賠償問題を政治的にあいまいにしていった。東西冷戦において日本を自陣営に取り込むためであった。米国は今もなお、中国と北朝鮮による「安全保障上の脅威」に対峙するなどの理由付けで、日本と韓国に軍事基地を置き続けている。この分断が、東アジアにおける歴史和解のひとつの障害となっているといえる。関係修復の当事者を日本と中国に限定してしまうと、米国も含んだマクロな構造が隠れてしまうので注意する必要がある。

冷戦構造は絶対的な壁ではない。ヨーロッパでは、同様の冷戦構造化の政治的な困難があったにもかかわらず、西ドイツ（当時）の若者たちはポーランドに通って、例えばアウシュヴィッツ強制収容所を史跡として整備し、またそこに宿泊・学習・交流施設「アウシュヴィッツ青少年国際交流センター」を建設することまで成し遂げたのである。個人の力ではいかんともしがたいような大きな構造を、その個人たちの微細な活動がかいくぐり、無力化して風穴を開けていったのである。

考えたこと2：アイデンティティ？

「アイデンティティ」はこのセミナーのキーワードのひとつだった。そのとき、もっぱら「国民」としてのアイデンティティが想定されていたようだ。4人組になって互いのアイデンティティを語り合うというワークで、他の人たちが「私は中国人です」とか「日本人です」のように言っているところで、私が「私は人間です。約20万年前に現在のアフリカで生まれました」と言ったら不思議がられていたから。でもどうしてアイデンティティが国民単位である必要があるのだろうか。そもそも「アイデンティティ」などという「賞味期限切れ」（上野2005）の概念を使う必然性があるのだろうか。

端的に言うと、「構築主義」の考え方を取り入れることが必要だと私は思う（上野2001）。「日本人」「中国人」とか、「男」「女」といった範疇と、それに結びつけられる性質が確固として実在しているものではなく、歴史的な過程の中でつくり出されたものとみなす立場が構築主義だ。

地球上にもともと国境線は存在しない。それは人間が恣意的に引いたものだ。そんな国境線の中に人間を囲い込んで、内なる多様性を均質化し、外との差異を強調することで国民国家という仕組みが成立した。国民としてのアイデンティティは（「日本人」であれ、「中国人」であれ）、その結果として作りだされたものだ。

このような構築主義的な立場は、思弁をもてあそぶようなものではなく、平和をつくるために必要なのだと私は考える。国単位で人間を分類し、統合していく考え方がナショナリズムである。教育やメディアを通して、人びとには国民としてのアイデンティティが植え付けられ、あたかもそれが自明のものであるかのように思い込まされていった。このナショナリズムは歴史の中で暴力性を発揮した。その最たるものが、諸国民間の総力戦となった第一次世界大戦、そしてそれ以上の惨禍をもたらした第二次世界大戦だったはずだ。

トラウマや、罪の単位として国民を立てることは、そのナショナリズムをセミナーというミクロな場で再生産することにつながる面もあるのではないだろうか。つまり「ナショナリズムの罠」に陥ってしまうおそれがあるのではないだろうか。今回のセミナーは「(中国)国民と(日本)国民との和解」という物語に沿って組み立てられているように感じた。しかし、ナショナリズムが人びとを駆り立てた戦争を根絶的に克服するということは、国民単位で人を分類したり、アイデンティティなるものを考えたりする枠組み自体から解放されるということではないだろうか。ナショナル・アイデンティティを自明のものとして前提とするのではなく、そこからの解放が、深い平和のために必要なワークではないだろうか。

アイデンティティおよびステレオタイプからの解放のためには、自分たちのものの見方がいかにそれらによって型にはめられているのかを反省する必要がある。今回のセミナーでは、各参加者の「アイデンティティ」について語り合うというワーク、そして日本と中国に該当する2脚の椅子を二つ向かい合わせに置いて互いに思いを述べるというワークがあった。これらはステレオタイプを浮き上がらせるために有効であろう。しかし実際のセミナーでは、私たちがいかにそうしたステレオタイプを内面化してきたのかを反省する機会はなかったように思う。そのために逆に「日本人」「中国人」という二元的な区別が最後

まで保たれるままだったように感じた。上で書いた日本兵に対して矛盾した感情を持つおばあさんのように、人が生きる現実には往々にして二元論では捉えきれないものだ。二元化をときほぐし、そうした微細な声を汲み取って多元化していくワークとはどのようなものだろうか。

これは「トラウマの世代間継承」というときの範囲の問題（トラウマは誰まで継承されるのか）、そもそも「和解」を考えると「誰と誰との和解」を想定しているのかという基本的な問題、そして「誰がこのセミナーに参加するか」という参加条件にも関わってくる。「日本人」であれば「加害者」であり、祖父や父たちの「罪」を継承しているのだろうか。「中国人」というだけで「被害者」の子孫となるのだろうか。ナショナリズムにおいて、国民は「家族」として表象される傾向がある。「私たちは加害者の子孫、彼ら／彼女らは被害者の子孫」という捉え方をすれば、そうしたナショナリズムの枠内に収まってしまうことになりはしまいか。

ある民族が全くの「被害者」であったり、「加害者」であったりすることはあり得ない。歴史上の出来事を、特定の民族に固定するのではなく、人類の歴史において起こったこととして捉えるべきだろう。あるときに被害者であった民族が別の時代には加害者となることもありうる。それを防ぐにも、人類史的な視点が必要だ。張教授が初日に述べた「南京事件を人類の視点で捉える」とはそういうことだろう。また、国際シンポジウム「南京事件の記憶」（1999年、ワシントン大学）におけるカナダ人研究者ブルック氏の問題提起「過去の虐殺の歴史を人種・民族間の対立構造のまま記憶することにどれだけ意味があるだろうか。日本人と中国人との戦争の中で起こった事件であるが、現在では人類の問題として考えるべきだ」も同じ考え方に基づいている（笠原 2002：293）。

私自身が、「日本人として」南京大虐殺の歴史を知ろうと思ったのだった。だから単純に「日本人」という区分を消し去れるとも、そこから逃れられるとも考えていない。私が「日本社会」で生まれ育った「日本人」でいることは間違いない。それに伴う政治的責任があることも承知している。けれども私の存在が「日本人」であることに還元されないことも確かなのだ。

セミナーでは常に「感情」に焦点が当てられた。構築主義の立場では、感情も社会的・政治的につくり上げられると考える。ここでもどうしてそのような

感情をもつようになったのかを振り返る、内省的なワークが必要になるのだと思う。そこでは感情の構築を振り返る知性が必要だ。ナチ政権下でドイツからパレスチナへと逃れたユダヤ系の両親をもつ、社会心理学者ダン・バル＝オンは、ナチ党员の子孫と、ホロコースト生存者の子孫との共同のワークを組織した。その中で参加者たちは、自分たちの試みを名づけるために、あえて「和解 reconciliation」という言葉を使わないで、「振り返ることと信頼すること To Reflect and Trust」という名称を選んだのだという (Bar-On 2008: 198-207)。このワークでは、集合的アイデンティティ（「ドイツ人」「ユダヤ人」）に基づくディベートは避けられ、個人的なストーリーを互いに語り、受容することになる。その中で集合的なアイデンティティとそれに結びつくステレオタイプが振り返って、解きほぐされ、参加者たちはどちらにも属さない「第三の側」へと変わっていくのだ。

考えたこと3：顔と名前の伴った記憶

実際に現地に行ってみると、そこに関する本の内容がよりいきいきと入ってくるようになるものだ。南京から帰ってきて、すでにもっていた笠原十九司氏の著書を中心に読んでみた。すると以前よりもスムーズに理解でき、そしてより実感をもって納得できる箇所が見つかった。

その内のひとつが『南京事件と日本人』（笠原 2002）の中で、犠牲者の「顔と名前を思い浮かべる」ことの重要性を説く箇所である。これは幸存者・夏淑琴さんと私自身が出会って、南京事件というとき、夏さんという具体的な人の顔と名前を思い浮かべられるようになったことが大きい。笠原氏の文章を引用してみたい。

「日本人の南京虐殺の記憶の仕方で、これまで欠如していたのは、犠牲になった人たちの顔と名前を思い起こさないことである。」(p.249)

「私たちが被害者の名前とか顔を知らないということは、逆にいうと、私たちは犠牲者の悲しみとか苦しみを思い起こさないということである。」(p.250)

「南京大虐殺を日本では数の問題に矮小化して議論するが、数の問題ではなくて、一人ひとりが南京でそれなりに幸せな生活を送っていて、それぞれが日本軍の侵略と蛮行のために犠牲になったということである。南京の中国人が自分

の身内を殺され、女性がレイプされるというように、一人ひとりが不幸を負ったということを考えると、私たちは犠牲者一人ひとりの顔と名前を思い浮かべようとしなければならないと思う。」(p.250)

これはたいへん重要な指摘だと感じる。南京事件に限らず、歴史上の巨大な暴力が、抽象的な概念や数字のレベルで思い起こされるにとどまっている例はよくある。「ホロコーストでユダヤ人 600 万人が犠牲になった」という言い方はその典型だ。だがそれだけだったなら、その暴力は「他人事」とどまるのだ。逆に「もし自分がその目にあったなら」、「自分の家族が犠牲になったとしたら」と具体的に考えられるようになったとき、犠牲者の痛みを自分のこととして感じ取れるようになるのだろう。

2011 年 10 月末に広島で開催された日本平和学会の研究集会に参加したとき、ホテルの朝食会場で手に取った「中国新聞」(2011 年 10 月 29 日 15 面)に次のような記事があった。中国で従軍したある元日本兵が、自らの戦争体験をまとめて自費出版したというニュースだった(「戦争の加害体験 向き合う自分史 浜田の鹿田さん自費出版」)。この人はその本に、中国で襲撃した村で「病気の娘をかばう父親の目の前で娘を殺したことや、捕虜を人体実験に差し出した経験などを包み隠さずつづった」。以前は、講演などの機会に、こうした残虐行為の告白をすることが、自分の長女の結婚に差し障るのではないかと悩んだ時期もあるのだという。しかし、そのとき「娘をかばった中国人にも同じ親心があったと気付き、がくぜんとした」。それ以来、証言活動をライフワークにすることを心に誓ったのだという。

この人はまさに「自分がその中国の父親だったなら」と立場を置き換えたのだ。このエピソードは、戦争と軍隊組織がいかに他者を「敵」として非人間化し、また兵士自身もまたそこで非人間化されるのか、そして他者を再び人間化して捉えることがどれほど大きい力をもつのかを示している。

つまり「他者の痛み」を感じとれるかどうか、暴力の抑止と平和のために根本的に重要な条件となるのだ。しかし、ナショナリズムやレイシズムによって、人間関係が分断されると、「痛覚の壁」が築かれてしまう。そして壁の向こう側の人びとが被る痛みを感じとれなくなってしまう。

この壁を崩すには、笠原氏の言う通り、犠牲者の具体的な顔と名前を伴った仕

方で記憶をしていくこと、つまり「記憶の人間化」がなされるべきだ。南京のセミナー会場で夏さんのお話を聞いて私が確信したのはそのことだった。そして、それに「感情移入（エンパシー）」のワークが付け加えられるべきだ。「もし夏さんが自分のおばあさんだったなら」と想像してみるのだ。上記の元日本兵が体験したのと同じプロセスを触発するワークが必要だと思う。このプロセスは、中国帰還者連絡会の他の元日本兵たちの記録をみても共通しているようだ。つまり戦場で殺害した人たちを、自分たちと同じ人間として想像できるようになることが、決定的な転機となっているのだ。

セミナーの会場だった南京師範大学の敷地には、かつて金陵女子文理学院があった。米国人宣教師のミニー・ヴォートリン（1886-1941）はその教員であり、南京の女性たちが日本軍から受けた性暴力の被害を日記に記録し続けた（ヴォートリン 1999）。その中でヴォートリンは南京で起こっていることを、日本人女性に知ってほしいと書いている。そうすれば「同じ女性として許せない」という声が日本国内で上がることを期待したのだろう。これはジェンダーの同一性を通じた、他者への感情移入ということだ。記憶を人間化し、他者に感情移入するためには、多様なルートがあるのだろう。

考えたこと 4：他地域の現場から学ぶ

歴史の分断を乗り越えようとする、和解と平和の仕事が世界各地ですでに行なわれている。その経験と知恵の蓄積は膨大なものだ。そこから学ばない手はない。私たちの「同僚」と「先達」は世界中にいるのだ。このセミナーではアートとサイコセラピー的な手法が主に使われた。一方、ヨーロッパの「行動・償いの印・平和奉仕」は、実用的な作業（建築や高齢者ケアなど）を通して和解を実現してきた。そのひとつの事例を私は「窓拭き」と「聴く耳」という論文で紹介した（小田 2012）。このプラハの事例では、ナチ支持者の孫が、ユダヤ系のホロコースト生存者のお年寄りの家庭を訪ね、窓拭きというまったく実用的な作業をすることが大きい意味をもった。また上述のように、償いの印のボランティアたちは、ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所跡に隣接して国際交流センターを建設した。宿泊と学習を可能にするこの施設は「平和のインフラ」として現在も多くの人たちに利用されている。このように和解とは多

経路（マルチ・トラック）で行なわれるものだ。南京に関しても、日中関係に上げてみても、まだ多くの経路が考えられるだろう。

希望：トラウマの記憶ばかりでなく平和の記憶をも

平和を考えているつもりが、話がいつしか戦争にすりかわっている。私たちの議論は、往々にしてそうなってしまうのではないだろうか。戦争を二度と起こさないために、戦争の悲惨さに焦点を当てて、それを記憶に刻むことはもちろん必要だ。けれども平和をつくろうとするなら、戦争の悲惨さへと迂回せず、平和それ自体に焦点を当て、心に刻むこともまた必要だ。私たちはそこに向かおうとしているのだから。でも「平和それ自体」なんてあるのだろうか、と疑問に思うかもしれない。絵に描いたような完全無欠の平和はないだろう、しかし、見方を変えれば戦争の最中にも平和はある。それは闇の中の光のようなものだ。その光に焦点を当て、そこから学び、それを強くしていくというアプローチもあるはずだ。

政治学者メアリー・カルドーは、冷戦後に起こったユーゴ内戦やルワンダのジェノサイドなどのいわゆる「新しい戦争」を分析した『新戦争論』で、きわめて興味深い指摘をしている。「いかなる「新しい戦争」においても、排他主義による政治に対抗しようとする現地の人々やそうした地域を見出すことができる。例えば自らをフチ族と呼び、自分たちの地域を大量虐殺から守ろうとしたフツ族やツチ族の人々、特にサラエヴォやトゥズラといったボスニアの諸都市において、市民的・多文化主義的な価値を守り通し特定民族集団に所属しようとしなかった人々、また和平交渉に取り組んだ北西ソマリランドの長老たちなどである」（カルドー 2003：14-15）。凄惨をきわめた旧ユーゴ、ルワンダ、ソマリアなどの武力紛争の最中においても、それに加わらずに平和を守ろうとした人たちが確かにいたというのである。彼らは少数派であった。しかし、いかにすれば私たちも彼らのようであり得るのだろうと想像し、未来のために活かそうとするとき多くの学びがあるはずだ。こうした人たちの記憶は、平和のための資源（リソース）だ。歴史の中のポジティブな側面に焦点を当てる時間が、このセミナーで取られると望ましいと思った。

南京事件の間に「良心的な日本人将兵」がいたことをも、当時現場に居合

せたジョン・マギーらアメリカ人宣教師たちが記録している（笠原 2005：338-344）。例えばこうした日本兵のことも思い起こすべきではないだろうか。もっとも彼らはあくまでも少数派であり、例外的な存在であっただろう。もし多数派であったなら、南京事件自体を阻止できたであろうから。また、良心的な日本人将兵がいたからといって、他の兵士が犯した残虐行為が免罪されるわけではない。「良心的」とはいえ、そもそも彼らも中国侵略に加担していた。しかし、たいていの者が人道的な犯罪へと流されていく状況において、踏みとどまった者が少数でもいたということには一定の意味があるのではないだろうか。そして、なぜ彼らにはそれが可能だったかと探求することも必要ではないだろうか。南京事件における良心的日本人将兵の存在を「平和の記憶」と位置づけるのは過大評価である。けれどトラウマ的記憶のみならず、こうした別の側面をも思い起こすことは、私たちに——制限つきではあるが——人間性への希望を与えてくれるように思う。

日本と中国の歴史は侵略や戦争だけではない。約 20 万年前まで遡れば、私たちの祖先はアフリカで誕生した数千人のホモ・サピエンスに行き着くとされる（オッペンハイマー 2007）。全ての人類の祖先は、アフリカで誕生したホモ・サピエンスだ。その少数の祖先たちがアフリカを出て、世界へと散らばっていったが、その末裔たちがたまたま別れて日本と中国に当たる地域に住むようになったのだ。ずっと時代は下って、倭国や日本、また隋・唐の違いができたとき、中国は先進地域で、日本人は身の危険を顧みず留学に出かけた。20 世紀のはじめには、逆に中国から日本に孫文や周恩来といった人たちがやってきて、明治維新後の日本から学ぼうとした。

歴史は続いていく。周恩来は、第二次世界大戦後、撫順戦犯管理所に収容された約千名の元日本兵を寛大に処遇し、戦争中の罪を見つめる時間を与えた。その元日本兵たちは約 6 年で日本に帰され、「中国帰還者連絡会」を結成して、自分たちの加害行為を証言する活動を続けている。直接の加害者が反省して、それを自発的に証言するということは、世界的にみてもまれなことだ。高齢化に伴う中国帰還者連絡会の解散と同時に、若い世代が「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」を結成した。戦後中国に「留用」された日本の民間人の一人は、帰国後「ABC 企画委員会」という市民団体を立ち上げて、ハルビンの七三一部隊の罪行や日

本軍の遺棄化学兵器の問題（相馬 1997）について日本で啓蒙活動を続けている。南京事件に材を取った合唱曲を、日本のある小学校教諭が作り、合唱団を組織して歌い継いでいる。この「紫金草合唱団」は南京での公演も果たしており、アートを通じた民間の平和交流として確かなネットワークが広がっている。

こうした平和の種子はいたるところにある。目を向けさえすれば希望は見つかる。平和とは、誰か万能の存在が一挙に与えてくれるものではない。このような種子の芽吹き、あるいは小さな湧き水から発するのだと思う。湧き水が流れ出し、結びつきながらいつしか大河となって、最初想像もつかなかった海へと流れ込む。これからの大きい平和も、無数の小さい平和が結びつくことで実現していくのではないだろうか。私たちはその湧き水のひとつなのだ。

参考文献

上野千鶴子（編）

2001『構築主義とは何か』勁草書房

2005『脱アイデンティティ』勁草書房

ヴォートリン、ミニー（岡田良之助、伊原陽子 訳）

1999『南京事件の日々ーミニー・ヴォートリンの日記』大月書店

小田博志

2012（予定）「窓拭き」と「聴く耳」:行動・償いの印・平和奉仕とインフォーマルな和解 石田勇治・福永美和子（編）『現代ドイツへの新たな視座』（第4巻）勉誠出版

オッペンハイマー、スティーヴン（仲村明子 訳）

2007『人類の足跡 10 万年全史』草思社

カルドー、メアリー（山本武彦、渡部正樹 訳）

2003『新戦争論』岩波書店

相馬一成

1997『置いてきた毒ガス』草の根出版会

平頂山事件訴訟弁護団（編著）

2008『平頂山事件とは何だったのかー裁判が紡いだ日本と中国の市民のきず

な』高文研

笠原十九司

2002『南京事件と日本人』柏書房

2005『南京難民区の百日一虐殺を見た外国人』岩波書店

Bar-On, Dan

2008, *The Others Within Us: Constructing Jewish-Israeli Identity*. Cambridge University Press